

古河電気工業(株) アナリスト・機関投資家向けテレカンファレンス 質疑応答録 (要旨)

日時：2019年8月1日(木) 16:40-17:40

内容：2019年度 第1四半期決算

説明者：取締役 兼 執行役員 財務・グローバルマネジメント本部長 福永 彰宏

Q：地域別の光ファイバ出荷数量の伸びを教えてください。

A：全体では前年同期比で▲5%。北米は微増、中南米は前年並み、欧州は▲5%、中国を除くアジアパシフィックが▲3割弱、日本が▲2割強。地域別の構成比は、北米が5割強、欧州が2割弱。

Q：光ファイバの価格下落の水準は？ Q2以降もまだ下落するリスクはあるのか？

A：製品にもよるが、インドでの価格下落が大きく▲5割程度。東南アジア、欧州では▲3-6割くらいの幅で価格が下落している。現在既に大きく下がった状態なので、今後ある程度は収まってくると思う。ただし、ファイバ余剰の状況は続くため、汎用的な光ファイバはもう少し価格下落が進む可能性がある。

Q：台湾の銅箔工場の火災影響について、設備や稼働状況などを教えてください。また、税前利益ベースで30億円程度の影響を想定しているとのことだが、項目等内訳を教えてください。

A：二つの工場のうち、一つの工場が被災した。一時的には2工場とも稼働を停止したが、その後一つの工場はすぐに復旧している。業績への影響は精査中、とご説明しているのは、設備状況の見極めに時間がかかっているから。一部の設備については既に復旧作業に取り掛かっており、Q4からは稼働出来ると考えている。本台湾拠点全体で1000トン/月の製造能力が、今回の火災により4割程度にまで落ちている。一部の設備復旧により、550トン/月まで回復する予定。すべての設備を復旧するかどうかについては検討中。我々の戦略をどうするか、に繋がるものなので、設備、市場、お客様の状況等をみながらしっかり検討していく。30億円の内訳については、精査中の現段階で申し上げるとミスリードになるので、今回はご容赦願いたい。

Q：光ファイバの価格下落の影響はかなり大きいですが、北米では影響は出ていないのか？

A：それほど大きくはないが、多少は受けている。北米企業から欧州・中国などに販売されていた光ファイバの一部が北米市場に流れることにより、多少の価格下落は起きている。

Q：北米の生産性低下や増産効果が出ていないということだが、何が起きているのか？

A：2月から急激に受注が回復してきた。いったん稼働を落とした工場を再稼働させた際、生産の混乱が起きてしまった。受注にきちんと対応しきれるよう取り組むことで、今後戻す余地はあると考えている。

Q：情報通信事業の減益要因の内訳は（生産性悪化、価格下落等）？

A：減価償却費・研究費の増加による▲6億円。加えて、以下の3つの要因が残り▲22億円のほぼ1/3ずつ。
①光ファイバ・ケーブルの価格下落 ②同製品の生産性の悪化 ③ブロードバンドソリューション事業におけるタイでの通信工事関連の減少等。

Q：機能製品の減益要因をご説明いただきたい。

A：サーマル・電子、メモリーディスク、銅箔が減益。AT・機能樹脂は比較的好調。データセンタに直結している事業でのマイナスが大きい。

Q：全体でのQ1計画未達幅はどのぐらいか？

A：10億円程度の未達で、情報通信ソリューション事業の未達幅が大きい。機能製品はそれほど下振れしていない。想定よりも良かったのは、エネルギーインフラ、自動車部品。

Q：情報通信事業の営業利益は1億円とのことだが、実力値としてはどのぐらいなのか？

A：光ファイバ・ケーブルの生産性悪化がなければ、ということ言うと10億円程度か。

Q：もし今期の利益が下振れした場合、85円の配当予想についてはどう考えているか？

A：キャッシュフローについては、投資を含めて慎重にみる必要はあるが、現時点では配当予想を見直す予定はない。

Q：今期の計画は下期に需要の回復を想定していたと思うが、現時点でその見立てを変える必要があるか？

A：ブロードバンドソリューションや電力事業等の工事案件や電池事業は、もともと下期型の事業。また、今期はデータセンタの市況回復を下期後半とみており、例年以上に下期型の計画になっている。データセンタ関連では、一部需要が戻ってきている製品もあるなか見立ては変えていない。Q2にはより状況が見えてくるので、改めてお話ししたい。

Q：情報通信セグメントの減益要因について。歩留り悪化要因とのことだが、三重火災の影響はあったのか？

A：北米拠点の話であり、三重火災の影響自体は僅少。

Q：自動車部品事業は、計画に対し上振れたのか？今後の上振れ余地は？

A：ほぼ計画通り。増収は見込むが、今後の受注に向けた立上げコストで（利益は）オフセットされる見通し。計画通りの進捗を見込んでいる。

Q：光ファイバ・ケーブルの生産性は、どのぐらいの時間軸で改善を見込んでいるのか？

A：生産性改善の取り組みを行っており、Q2から成果が出てくるものとみている。

Q：光ファイバ・ケーブル事業について。前回の説明では、北米は2割強の売上成長を見込むということだったが、生産対応との乖離だけが悪化要因なのか？

A：受注好調という状況に変化はないが、ものづくりの問題でリードタイムが伸び、十分な受注対応が出来ていない。また、欧州やアジアでの価格下落など市場環境が厳しくなっている。これらのリスクをどう埋められるかが課題。高付加価値のローラブル・リボンケーブルなど、しっかりと製品を拡販していく。

Q：グループ変革本部による原価低減の成果を定量的に説明してほしい。

A：まずは、グローバル光ファイバ・ケーブル、エネルギーインフラ、銅条事業に特化して、グループ変革本部による活動も含めたさまざまな施策を進めている。PDCAをしっかりと回し、組織実行力を高めることに主眼を置いている。特に光ファイバ・ケーブルは、北米での増産対応、高付加価値製品拡販などのテーマについてQ1で課題整理を終え、実行フェーズに入っている。活動成果については、Q2決算発表時に定量的にご説明させていただく。

Q：エネルギーインフラ事業の出だしは順調のようだが、黒字化定着に向けたシナリオを確認したい。

A：収益性は改善している。工事原価の低減や、海底線ケーブル生産・生産性改善のための投資などを進めている。また、千葉第二工場の稼働により、受注を取り込んでいく。今年度黒字化に向け、順調な進捗状況である。

Q：光ファイバ・ケーブル事業は、前回の説明と比較して一転（悪化）にみえるが、悪化内容について、市場要因と自社要因の内訳は？

A：生産性については、6月に改善を見込んでいたものの難しかった。

Q：北米の光ファイバ・ケーブル市場は、キャリア向け需要の減速やCATV向けの遅れなどがあると聞いているが、需要環境をどうみているか？

A：キャリアやCATV向け需要が若干減速していることは認識している。今後需要が戻る見込みはあるが、（すぐに）大きく戻ることはないかもしれない。

Q：機能製品セグメントについて。データセンタ向け需要は、下期後半から回復するという見通しに変化はないか？

A : 現時点でもそのようにみている。Q 2 以降に見極めたいが、下期後半回復を前提とした計画にしている。

以上